

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	23-413	手稲溪仁会病院 白坂知彦 独立行政法人国立病院機久里浜医療センター松下幸生
題名 (原題/訳)		
Regional Cerebral Blood Flow Changes in Chronic Alcoholic Patients Induced by Naltrexone Challenge During Detoxification 解毒中のナルトレキソン投与によって誘発される慢性アルコール中毒患者の局所脳血流変化		
執筆者		
Ana M. Catafau, Alvaro Etcheberrigaray, José Perez de los Cobos, Montserrat Estorch, Josep Guardia, Albert Flotats, Lluís Bernà, Carina Mari, Miquel Casas and Ignasi Carrió		
掲載誌		
J Nucl Med. 1999 Jan;40(1):19-24.		
キーワード		PMID
アルコール依存症 ナルトレキソン 局所脳血流変化		9935051
要 旨		
<p>アルコール依存症治療のためのオピオイド拮抗薬ナルトレキシンの最近の導入は、主に、飲酒と依存症における内因性オピオイド系の関与の証拠を提供する行動動物モデルに基づいている。しかし、アルコール依存症患者におけるナルトレキシンの効果の神経生理学的メカニズムは不明のままである。本研究では、解毒中の慢性アルコール依存症患者におけるナルトレキソン負荷が局所脳血流 (rCBF) に及ぼす影響を調査した。</p> <p>方法: 16 人のアルコール依存症入院患者が 99mTc-ヘキサメチルプロピレンアミンオキシム (HMPAO) 脳 SPECT を 2 回実施した。1 回目は禁酒 10 日目に基礎 SPECT、2 回目は禁酒 12 日目にナルトレキソン 150 mg を経口投与した後の SPECT であった。各半球の眼窩前頭、前頭前野、外側側頭、内側側頭、基底核、視床について、領域対小脳比を取得した。2 つの SPECT 間の rCBF 変化のパーセンテージは、領域ごとに $100 \times (\text{ナルトレキソン} - \text{ベースライン}) / \text{ベースライン}$ として計算された。統計的比較には、テスト - 再テスト測定を含む、年齢を合わせた正常ボランティア 13 名の脳 SPECT の値を使用した。</p> <p>結果: ベースライン状態では、アルコール依存症患者は対照群よりも左眼窩前頭皮質 (84.0+/-5.1 vs. 89.8+/-5.0, $P < 0.01$) および前頭前野 (左半球: 87.4+/-5.2 vs. 96.2+/-3.6, $P < 0.001$、右半球: 87.0+/-4.9 vs. 95.8+/-4.2, $P < 0.001$) で rCBF が低かった。ナルトレキソン投与後、左大脳基底核 (-3.3+/-4.0% vs. 1.5+/-4.1%, $P < 0.05$)、右大脳基底核 (-4.2+/-4.9% vs. 0.6+/-2.7%, $P < 0.01$)、および左内側側頭葉 (-4.5+/-6.8% vs. 2.2+/-2.9%, $P < 0.01$) で、再検査値と比較して有意な rCBF の減少が認められた。</p> <p>結論: ナルトレキソン投与後に SPECT で検出された、基底核や左側頭内側部などのオピオイド受容体が豊富な構造における rCBF の減少は、これらの領域におけるナルトレキソン誘発性の代謝活動低下を反映している可能性がある。これらの結果は、アルコール依存症におけるオピオイド系の関与を裏付けるものである。さらに、ナルトレキソン誘発性の rCBF 変化が内側側頭部構造と基底核に局在していることは、渴望における感情的記憶と強迫性現象の関与を裏付けるものであると考えられた。</p>		